

コミュニケーションとしてのあいづち

——アメリカ人と日本人に見られる表現の違い——

久保田真弓

● 研究論文

はじめに

あいづちと一口に言っても様々な形態がある。相手の話に合わせて「ええ、ええ」と言ったり、強く同意を示すために「なるほど」と言いながら深くうなずいたりするものがある。また意識して一生懸命にあいづちを打つこともあれば、半ば無意識に頭を振ることもある。「ええ」と音声で表わすあいづちを言語メッセージとし、微笑みやうなずきを非言語メッセージとすると、聞き手のあいづち行動は、言語メッセージと非言語メッセージが微妙に関わって表出されたコミュニケーション活動と捉えることができる。人はしばしば言語メッセージの代わりに非言語メッセージを使ったり、言語メッセージに非言語メッセージを組み合わせて、「聞いていますよ」「わかりました」という姿勢を相手に対して信号として送っている。話し手（以下話者という）は、その合図に合わせ話を盛り上げたり継続したり、あるいはほどよく切り上げたりしているのである。

▷ キーワード

あいづち

発話調整動作 (regulators)

言語

非言語コミュニケーション

これらの話者と聞き手におけるやり取りには文化的な決まりがある。それは日本人同士の談話では意識に上らないため看過されやすいが、外国人が日本語を学習する場合には、日本語の自然なコミュニケーション能力を習得する上で欠くことのできないルールと言ってよいであろう。

これまでのあいづち研究では、表現形式や機能、タイミング、頻度についてかなり詳細な分析がなされてきた。あいづちの機能として相手の話を「聞いている」「了解した」という働きのあることは、日英両言語のあいづち研究者の間ではほぼ一致して認められている（堀口、一九九一；Fries, 1952；Kendon, 1967）。また表現形式に関する日本語のあいづち研究では、「ええ」「うん」など短い言語表現を伴うものや相手の話を一部繰り返すことに注目して研究されてきている（松田、一九八八、杉戸、一九八九）。一方、英語のあいづち研究では、短い音声表現“yeah”“uh-huh”などのほか、うなずきや視線が取り上げられてきている（Yngve, 1970；Kendon, 1967；Duncan and Fiske, 1977）。

しかし、これらの研究でのあいづちの定義は様々で「実質的な内容を表現する言語形式を含まない」（杉戸、一九八九）とするものもあれば、広義のあいづち（long back channel）と称して、相手が始めた談話を完成したり、言い直したり、不明な点を聞き返すもの（Duncan, 1972, 1975；Duncan and Niederehe, 1974）まで含めているものもある。ところで、日米の研究で共通して取り上げられてきたのは、あいづちの頻度の研究であり、日米比較では、日本人がアメリカ人より約二倍多くあいづちを打つことが明らかにされている（Maynard, 1986；White, 1989）。

日本人のあいづちの頻度が多い理由は、メーナード泉子によって使用言語の特色から説明されてきている（Maynard, 1986）。それによると日本語でも英語でもあいづちの多くは話者が間を置いた文節の切れ目付近や話のリズムが止まるときにとられている。しかしアメリカ人のあいづちは文の終わりで間があるときみられるのに対して、日本人のあいづちは、終助詞や間投助詞に続き、あるいは付加疑問に似た文末表現（「じゃない」「でしょ（う）」など）で多く見られ

る。英語でも付加疑問に当たる「you know」などの相手の反応をみる表現はあるが、その使用は限られるので、結局日本語での談話の方が文脈の中であいづちを引き出す要素が多くなるという。

さらに、ホワイト (White, 1989) は、話者の話す文節の数に注目し、問の前の文節を数え、日本人の英語の会話ではアメリカ人のそれよりも短文であることを指摘している。短文が多いとあいづちを引き出す問が多くなり、このことがあいづちの頻度に影響するのだと主張している。

エックマンとフリーゼンは、身体の動きや顔の表情の研究を五つに分類し、その一つを発話調整動作 (regulators) と名付けた (Ekman and Friesen, 1969)。発話調整動作とは、あいづちのうち話者の話を一層継続させたり繰り返させたり、急がせたり、詳しく述べさせたりして会話の流れを調整するものをさしている。エックマンらは発話調整動作にうなずき、まばたき、視線の動き、手の動きの他に、話者が聞き手に対して注意を払うよう促したり、少し待つよう指示したりする動作も含めている。これらの動作は話者や聞き手によって会話の流れを規制するのに行なわれるが、ほとんど無意識に使われているという点に特徴がある。したがって、それは意思によって抑制することが困難で、反復学習によってのみ習得されると説明している。さらにその特徴として無意識に行なっているが、意識的に使用することもあり、対話者はいつも通り発話調整動作があれば気づかないが、それがいったんなくなると違和感を感じると述べている。

従来のあいづちの研究では、それが言語と非言語による表現形態を持つという認識はあったが、両者の相互関連に特に注目し掘り下げることはなかった。しかも聞き手は、言語と非言語の部分を微妙に組み合わせて話者に信号を送っているが、半ば無意識になされる習慣化したコミュニケーション行為であることに注目されることはほとんどなかった。

このことには、研究手法上の難しさに起因するとともに、録音のみによる音声のあいづちの分析に研究が集中されてきたのが原因であろう。そこで、あいづちをビデオに録画したものを使用し、話者と聞き手の表情と談話の内容を調べて、

言語、非言語の両側面からあいづちを正確に記録、分析し総合的に考察する必要がある。

あいづちが言語面と非言語面の両方にもつ特徴に注目して研究することにより、もしあいづちの言語としての性質が強ければ、言語と同様に規則性を見つけ、意識して学習させることができることになろう。しかし、非言語面の性質が強ければ、なかば無意識にかつ習慣的にあいづちが打たれていることになり、その習得のためには、あいづちの打たれている文化の背景を知る必要がある。

そこで本研究では、相手の言ったことを言い換えたりするような広義のあいづちをも含め、あいづちを「聞き手が話者に送る言語、非言語の行動を含んだ信号」と定義し、ビデオ録画したあいづち行動を分析することとした。特に日・英両語ができるアメリカ人同士及び日・英両語ができる日本人同士による会話をビデオ録画し、聞き手のあいづち行動と話者の使用言語及び聞き手の文化的背景によるあいづちへの影響を究明し、コミュニケーションにおける非言語の重要性を調査することとした。この場合、文化的背景によるあいづちへの影響を明らかにするため、話者の国籍のほか、アメリカ人は日本滞在年数、日本人は米米滞在年数の相違を考察に加え比較検討することにした。

あいづちの特徴を的確に把握するとともに、あいづちを言語面と非言語面から総合的に分析して話者の文化的背景と使用言語との関係を研究することは、日本人とアメリカ人のコミュニケーションの様式の相違を具体的に究明するのに役立つだけでなく、言語と非言語の密接な関係を提起するうえできわめて重要である。このことは談話分析においてあいづちのもつ規則性の解明にも示唆に富んだアプローチであるように考えられるのである。

一 調査方法

1 被験者

被験者としてアメリカ中西部の二都市（インディアナポリス、ブルミントン）に住む一八名（男九名、女九名）のアメリカ人と同じ都市に住む一六名（男五人、女一人）の日本人をアンケートによる調査で抽出した。アンケートでは、第二言語を学習した国での学習状況、滞在年数、帰国の年、帰国後から現在までの学習状況等を調査した。抽出基準として、アメリカ人は日本に一年以上滞在し、ACTF⁽¹⁾Lのガイドラインの日本語能力が中級以上の者、日本人はアメリカに一年以上滞在し英語能力が中級以上の者とした。その結果被験者は表1のようになった。

2 方法

アメリカ人と日本人とを同じ国籍同士で二人一組に組んだ。その際、滞在年数が比較的等しい者を組にした。つまり表1のように隣接する奇数と偶数番号、コード番号でいうと日本人ではJ1とJ2、J3とJ4、アメリカ人では、A1とA2、A3とA4を一組とした。

操作としては、一組の一人Aが別室に用意した英語のテレビのホームドラマ（三〇分）の最初五分をみて、それを元の部屋に帰り相手Bに英語で一〇分で話し聞かせる。次にBが別室に行き、先のテレビドラマの最後五分を見て、Aに英語で一〇分話し聞かせる。これを第一セットとし、第二セットでは日本語のテレビドラマを見て日本語で話すこととした。

本調査では被験者の二人が話す部屋にテープレコーダーとビデオカメラを設置して録画録音し、アメリカ人の被験者

表1 被験者リスト

日本人					アメリカ人								
No.	Code	性	年齢	滞在年数	No.	Code	性	年齢	滞在年数	a)	b)	c)	d)
									滞在年数	時	歳	学習年	
1	J1	F	20-30	1.50	1	A1	M	20-30	0.67	'82	18	7.0	
2	J2	M	30-40	1.75	2	A2	M	20-30	1.16	'88	22	3.5	
3	J3	M	30-40	1.75	3	A3	M	20-30	2.00	'87	25	3.0	
4	J4	M	30-40	1.67	4	A4	M	20-30	2.16	'88	22	4.0	
5	J5	M	20-30	2.33	5	A5	M	20-30	1.25	'88	18	4.0	
6	J6	F	20-30	2.83	6	A6	M	20-30	1.00	'90	18	4.0	
7	J7	F	20-30	5.67	7	A7	F	20-30	1.29	'89	18	3.0	
8	J8	F	30-40	8.58	8	A8	F	20-30	0.83	'90	18	3.5	
9	J9	F	40-50	10.00	9	A9	F	30-40	2.83	'87	29	6.0	
10	J10	F	50-60	35.00	10	A10	F	20-30	2.08	'90	18	7.0	
11	J11	F	20-30	8.25	11	A11	F	30-40	4.00	'86	16	3.0	
12	J12	M	40-50	17.50	12	A12	F	40-50	7.00	'84	26	7.0	
13	J13	F	30-40	13.00	13	A13	M	30-40	9.33	'88	14	10.0	
14	J14	F	20-30	14.00	14	A14	M	30-40	7.00	'90	27	7.0	
15	J15	F	> 60	39.00	15	A15	M	30-40	16.00	'75	5	5.0	
16	J16	F	> 60	39.00	16	A16	F	< 20	18.00	'90	5	5.0	
					17	A17	F	> 60	29.00	'85	1		
					18	A18	F	> 60	11.00	'36	1		

注：a)日本での滞在年数 b)日本での滞在最終年 c)日本語の勉強を始めた歳 d)日本語学習期間

一八名、日本人の被験者一六名による英語と日本語の談話を採取して分析した。

二 分析結果

まず計量分析と質的分析の必要から、あいづちを次の五つに分類した。

(1) うなずき（頭の縦振り）

うなずきというのは音を伴うことのない、頭の縦振りのみのあいづちである。ただし頭を上下に一回動かすものから、継続して何回か動かすものまで含む。

(2) 同時あいづち

音声（「ええ、ええ」など）を伴いながら同時にうなずくものである。

(3) 短音声あいづち

頭の縦振りを伴わないで短い音声（「ええ、ええ」）だけのあいづちである。

(4) 広義のあいづち

話者が始めた文を聞き手が完成させるもの、言い換えたり、一部を繰り返したりするもの、そして不明な点を聞き返すものの三つである。

(5) 非言語動作

うなずきを除いた非言語動作のうち頭の横振りや顔の表情（笑い、微笑み、しかめ面など）によるあいづちをいう。

1 使用言語とあいづちの関係

1 計量分析

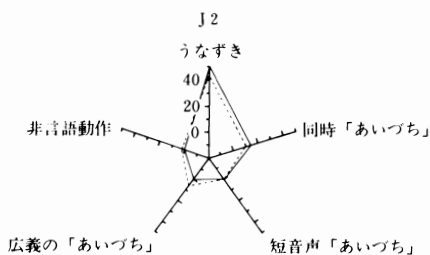
まず録画録音から文字起こしした談話の中から上記のあいづちに分類し、発生頻度を数えた。その際、あいづちにも種々の形態や長さのあることが明らかになったが、一回に起きたあいづちは一つとして数えた。例えば、頭の振りにより動かし方、速さ、長さが異なる。人により一回のあいづちに頭を一回縦に振るものもあれば、話者の話す音節にわたって「ああ・はあ・はあ・まあ」と何回か続けて頭を振るものもある。計量分析ではそのような連続した頭の縦振りも一回として数えた。音声を伴うあいづちの場合も同じように数えた。使用言語と話者の国籍を独立変数、五分類したあいづちを従属変数とし、まずアメリカ人によるあいづちについて、それぞれ英語で話した場合と日本語で話した場合とで検定を行なった。日本人によるあいづちも同様の検定を行なった。

その結果、使用言語とあいづちの関係について次の二点が明らかになった。日本人が英語で話す場合、日本語で話したときより統計的に有意に頭の振りが減っているということである ($t(12) = 2.30, p = 0.040$)。そして広義のあいづちは増えているということである ($t(12) = -2.91, p = 0.013$)。ところがアメリカ人の場合にはいずれも統計的に有意な差は何も見られなかったのである。

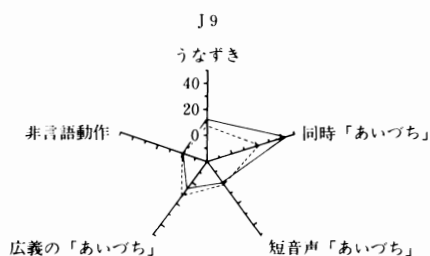
2 あいづちの相互関係

あいづちは人によってうなずきが多い人、「ええ」と言いながら頭を振ることが多い人など個人差があり、計量分析しただけでは使用言語の影響をみるのに不十分であった。そこであいづちの個人差をあいづちの「個別パターン」(personal patterns)と呼び、五分類したあいづちの相互関係と使用言語との関係をみるため、五分類したあいづちを指標にしたリーダーダイアグラムを被験者ごとに書き、個別パターンの特徴を調べた。それによると日本人の場合、

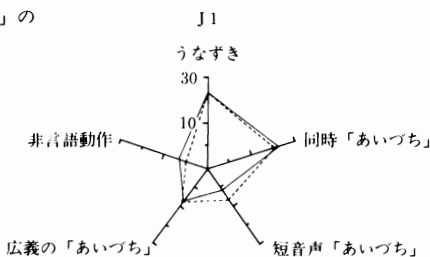
(1) うなずき多用パターン



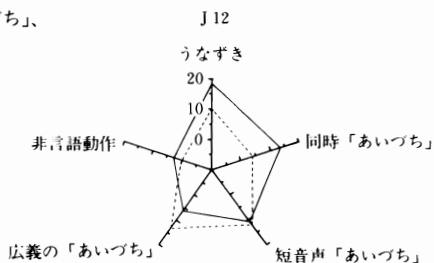
(2) 同時「あいづち」パターン



(3) うなずきと同時「あいづち」の併用パターン



(4) 「うなずき、同時「あいづち」、短音声「あいづち」の混合パターン



実線 (—) は英語を示している。
破線 (-----) は日本語を示している。

図1 4つの個別パターン

(1)うなずき多用パターン、(2)同時あいづちパターン、(3)うなずきと同時あいづちの併用パターン、(4)うなずき、同時あいづち、短音声あいづちの混合パターンの四つにわかれた。

一三名の日本人のうち五名が、英語と日本語という使用言語に関係なく同じパターンのあいづち(図1のJ1、J2)であり、他の四名はかなり相似したパターンのあいづちをうっている(図1のJ9、J12)。したがって日本人一三名中九名が使用言語に関わりなく同様のパターンのあいづちを打ち、被験者によって異なる個別パターンであるもの、使用言語によって変化していかないことが明らかとなった(図1参照)。

また残り四名の個別パターンは、使用言語によって異なり、多少ずれた型で現われた。これは先の統計分析でも明らかになったように、広義のあいづちを使用する頻度の差が影響しているように思われた。すなわち同一の被験者でも英語と日本語とによって広義のあいづちを使用する頻度が著しく違うと、他のあいづちの頻度にもそのことが影響を与えるようである。

ところで文脈を追っていくと、広義のあいづちを打つ場合、それまで軽快に打っていた短いあいづちやうなずきが止まるような例がいくつか見られた。広義のあいづちは、相手の文を完結するなど内容を伴った表現形式であるため、考えをまとめる時間がとられているようであった。すなわちメッセージの送り手が頭の中の考えや感情を言語や他の記号体系に記号化(encode)するために意識がそちらに集中しているようであった。人により頭をリズムカルに縦に振ったり、短いあいづちを入れたりする個別パターンをおさえると、広義のあいづちを打つ前にその動きが止まるのが顕著に分かる。したがって、日本人話者の場合、日本語より英語で話したときのほうが頭の振りが減少し、広義のあいづちが増加しているという統計分析の結果は、英語、日本語という使用言語の影響というよりも、むしろ五分類したあいづち相互の関係によって引き起こされた結果であるといえるようであった。

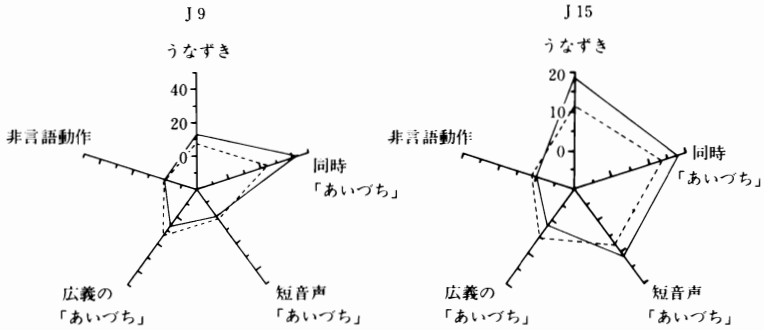


図2 長めのあいづちと他のあいづちの関係

3 うなずきの形態

統計分析では頭の振り方に関係なく扱ったが、ここでは頭の振り方の個別パターンと使用言語の関係をみてみよう。頭の振り方の個別パターンを抽出する際にバードウィステル⁽²⁾ (Birdwhistell, 1970) は、言語学での手法と似た手法で頭の振り方等の動作学 (Kinesics) の研究もできるといっている。彼によると、研究者がある規則性を見出した時点で、それを連続した動作のなかから抽出して一単位とする。それを参照しながら同じ様な動作を捜し、それらが起こった文脈を次の三点に留意して比較するのである。

(1) その動作が確かに単位と呼べるものかどうか。(2) 比較可能な文脈のなかで起こっているかどうか。(3) 同じ文脈でその動作が起こった時と起こらなかった時とで違いがあるかどうか、である。

このような手法を参考に、録画した資料から対象とする「音声を伴わないうなずき」の部分被験者ごとに記録し、使用言語が英語の場合と、日本語の場合を比較した。その結果次の五つのタイプが認められた(久保田、一九九三)。

(1) 一回完結型…「うん」と言う時にうなずくような一回ずつはっきり区切るうなずき。

(2) 持ち上げ型…まず頭を後ろに引き、それから反動で頭をもとの位置に戻

すもの。その際、一回バウンドしたり二、三回バウンドしたりすることもある。

(3) 引き下げ型…あごを引いてうなずき、頭をもとの位置に戻すもの。その時何回かバウンドすることもある。

(4) 小刻み型…頭を小刻みに速くいくつか打つが深くないもの。

(5) 連続型…(4)よりも長いがひとつひとつ深く頭を振るもの。

この中で完結型うなずきが典型的な日本人話者のあいづちで、小刻み型、連続型うなずきが典型的なアメリカ人のあいづちといえそうである(久保田、一九九三)。

使用言語との関係では、日本人の場合、英語から日本語に使用言語を変えても頭の振り方は変わらず、個人差が大きかった。つまりうなずき方にも個別パターンがあり、それは使用言語にはあまり左右されない。日本人で一番多く見られたのが、完結型のうなずきで一六人中七人にみられた。連続型は三人(J7、J11、J12)にみられ、アメリカ滞在が比較的長く(五・六年、八・二年、一七・五年)、アメリカ人相手に仕事をしている人達であった。しかしアメリカ滞年在年数が一八年以上という人々(三人)には連続型はみられなかった。したがって、うなずきは個別パターンには密接に関係するが、滞年在数には影響されていない。

アメリカ人被験者が日本語を使用する場合、一八人中七人に完結型のうなずきが見られたが、英語使用の場合には完結型は現われず、持ち上げ型か小刻み型、連続型が認められた。

2 文化とあいづちの関係——計量分析

あいづちを従属変数、国籍を独立変数とした分散分析(MANOVA)によると、五分類したあいづち使用頻度の総合計で日本人は平均一〇・一・二三回、アメリカ人は平均六七・三八回であり、統計的に有意に差があった(Wilks

lambda = .37, $F(5, 23) = 7.93, p < .000$ 。つまり日本人はアメリカ人と比べあいづちをはるかに多く使っていることがわかった。これは水谷 (Mizutani, 1982)、メーナード (Maynard, 1986)、ホワイト (White, 1989) の調査とはほぼ同じ結果である。

五種類のあいづちについて、国籍を独立変数とした分散分析 (ANOVA) を行なったところ、「同時あいづち」を日本人はアメリカ人に比し多く用いていることが明らかとなった ($F(1, 27) = 12.87, p = .001$)。また「短音声あいづち」も日本人は、アメリカ人に比し多く用いていることが明らかとなった ($F(1, 27) = 6.77, p = .015$)。これはあいづちの分類をいかにするかによってコミュニケーションの様式が明らかになされる可能性を示唆しているといえよう。

被験者たる日本人の間では、滞在年数に比例したあいづちの有意な変化はみられなかったが、アメリカ人の場合には変化がみられた。すなわち日本に長く滞在したアメリカ人ほど「うなずき」が増加しており、($r(16) = .4297, p = .0482$) また「同時あいづち」がやや増加していたといえる ($r(16) = .4224, p = .052$)。これは滞在年数とあいづちの回数の相関関係をスピアマンの階級別相関分析で調べた結果なのである。

3 コミュニケーションとあいづち——連続、不連続動作

非言語動作には、話す時身体がリズムカルに動くような連続動作とジェスチャーのような不連続のものがある。うなずきの型により習得しやすきものと習得しにくいものがあることを指摘したが、これはうなずきという動作の連続性に起因すると思われる。日本人の完結型うなずきの一つづつ区切りがあり、アメリカ人の小刻み型うなずきに比較して顕著な動作である。日本語の会話では、話者も話の流れをコンマで切るように、文節の切れ目でそのようなうなずきを用いることが多いと指摘されている (Maynard, 1986)。英語の会話では、話者の手や身体が自分の会話の調子に合わ

せて動き、応対している聞き手の身体が話者の動作に応じて動く交互作用的同調性 (interactional synchrony) が報告されている (Condon and Ogston, 1966)。したがって、日本滞在中のアメリカ人にとって、完結型うなずきは足を組むといった身体動作のように顕著であり、かつ、そのようなうなずきを多用して話す日本人話者の行動様式に同調したため、「あいづち」のうち、うなずきが増加したと考えられる。

それに反して被験者の日本人は、アメリカ人の滞日平均年数(六・四年)より長期にアメリカに滞在している(二・七九年)にも拘らず、小刻み型うなずきをあまり用いず、日本的完結型うなずきを使用していた。これはアメリカの小刻み型うなずきは連続性のものであるため、完結型のようにはすみやかに学習されなかったためか、あるいは習慣化した完結型うなずきを意識的に止めることが難しいからであると考えられる。

アメリカ人にとって完結型うなずきは、区切りがあり顕著な動作であるため、意識的に使用することができ習得も早いと考えられる。日本人にとって、小刻み型うなずきは視線の使い方や間の取り方を学ぶのと同じように区切りがはっきりしていない連続的動作を学ぶことになり、習得に時間がかかるように考えられる。

異文化コミュニケーションにおいてジェスチャーや立ち居振るまいなどのようなしぐさの重要性は確かに指摘されたが、言葉に付随するあいづち的的身体動作、視線、手の動きなどの発話調整動作として使われる非言語メッセージの重要性はあまり指摘されることがなかった。しかし、自然なコミュニケーションを図るうえで言語だけでなく非言語、特に連続性の動作の取り扱いが今後の研究課題であるように思われる。

結びにかえて

バードウイステルは、人間のコミュニケーション行動の六五―七〇%は非言語であるという (Birdwhistell, 1970)。
この指摘はきわめて重要性をもっていると考えられる。確かに自然なコミュニケーションを行なううえで、非言語は重要な役割を果たしていることは注目されてきたが、コミュニケーションとしての重要性は十分に認識されてきていない。それは非言語メッセージが言語メッセージと密接に関連しており研究手法が難しいことから、言語と非言語とを区別して取り扱うことが多かったからである。これは言語が任意に決められた記号で構成されているのに対し、非言語は必ずしもそうでなく、任意に決められた記号から生理的反応までも含まれる。したがって意識して使われたり瞬間的に反応されることもある。しかも非言語には、人の感情に付随して起こる顔の表情のように普遍的なものから、挨拶にみられるしぐさのように文化により異なるものもある。普遍的な顔の表情でもそれは話者の心理状態を微妙に表わすので、文化によって言葉では「ええ、ええ」「はい、はい」と調子よくあいづちが打たれていても、話者はその音調や聞き手の顔の表情から言葉とは逆に誠意のなさを微妙に読み取ることもある。このように言語と非言語メッセージが相反するとき、一般には非言語メッセージを信じるといわれている (Burgoon, 1985)。

コミュニケーション活動の在り方は、話者が言語ないし非言語メッセージを使ってどのような対人関係を築いているかによっても異なっている。日本人の伝統的コミュニケーション・スタイルでは、話者は多くを語らず、その分だけ聞き手がその心を察し、相手を理解しようとすることを美德としてきた。このような配慮と察しは、日本人が対人関係をよくする重要なコミュニケーション能力になっている。したがって日本人は、アメリカ人に比較して無意識のうちにあいづちを多用し、配慮と察しで不明確な部分を確認しているともみられるわけである。

これまで日米文化の研究において、あいづちの表現形式や頻度の比較はされてきたが、このようなコミュニケーションを行なううえで、あいづちの重要性を示す実証研究はなされてこなかった。これは異文化コミュニケーションそのものの研究を進展させるためにも重要な課題であった。

さらに指摘しておくべきことは、英語の談話が話者と聞き手の間の問答形式で進められる「対話」的要素をもつのに対し、日本語の個人的会話は、聞き手が話者の文を完成する協調的な要素がある「共話」だといわれてきた(水谷、一九八八)。これは、アメリカ人と日本人の談話に対する考え方や談話に対する価値観の違いにも基づいていると思われる。しかし価値基準の異なる文化でのあいづちを比較すると、このことは必ずしも断定が容易ではない。日本人があいづちを多用するのは、協調的で「思いやり」のある話し方を重視するためであるということもできるが(White, 1989)、アメリカ人に相手の意見を聞こうとする協調的な態度がないということではない。アメリカ人にとっての「あいづち」である視線の役割を重視すべきだという考えもある(Miller, 1991)。このようにあいづちは、言語、非言語を区別して分析したのでは把握しがたい現象であり、言語、非言語の両方の特質を総合した研究手法を開発し取り組んでいく必要がある。

このことは、本研究で「広義のあいづち」の「うなずき」への影響を述べたように、リーダーダイアグラムなどによって個別パターンを把握するとともに、あいづちの相互関係を適確に把握できるような研究手法を工夫する必要性を示唆しているとともに、言語的あいづちとうなずきの関係、うなずきと視線の関係などのように、言語と非言語の関連に焦点を合わせて、社会で受け入れられているコミュニケーション・スタイルを明確にすることを必要としているように考えられるのである。

<注>

- (1) ACTFL Proficiency Guidelines による。主に聞いて覚えた表現や学習した表現を組み合わせて文を作り、あるいは質問応答して簡単なコミュニケーション行動を作り、維持し、終えることのできる能力を中級とする。
- (2) ハードウェアは、動作学と称して身体の動きは秩序ある体系を持っており、構成要素に分類しようと言う。

<引用文献>

- Birdwhistell, R. L., 1970, *Kinetics and Context*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Burgoon, J. K., 1985, "Nonverbal signals," in M. L. Knapp and G. R. Miller (eds.), *Handbook of interpersonal communication*, Beverly Hills: Sage, pp. 344-389.
- Condon, W. S. and W. D. Ogston, 1966, "Sound film analysis of normal and pathological behaviour patterns," *Journal of Nervous and Mental Disease*, 143, pp. 338-347.
- Duncan, S. D., Jr., 1972, "Some Signals and Rules for Taking Speaking Turns in Conversations," *Journal of Personality and Social Psychology*, vol. 23, no. 2, pp. 283-292.
- Duncan, S. D., Jr., 1973, "Toward a grammar for dyadic conversations," *Semiotica*, vol. 9, pp. 129-146.
- Duncan, S. D., Jr., 1975, "Interaction Units During Speaking Turns in Dyadic, Face-to-Face Conversations," in A. Kendon, R. M. Harris and R. M. Key (eds.), *Organization of Behavior in Face-to-Face Interaction*, Mouton: The Hague.
- Duncan, S. D., Jr. and D. W. Fiske, 1977, *Face-to-Face Interaction: Research, Methods, and Theory*, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associate.
- Duncan, S. D., Jr. and G. Niederehe, 1974, "On signaling that it's your turn to speak," *Journal of Experimental Social Psychology*, vol. 10, pp. 234-247.
- Ekman, P. and W. V. Friesen, 1969, "The Repertoire of nonverbal behavior: Categories, Origins, Usages, and Coding," *Semiotica*, vol. 1, pp. 49-98.
- Fries, C. C., 1952, *The structure of English*, New York: Harcourt, Brace & World.

- 堀口純子、一九九二、「あいづち研究の現段階と課題」、『日本語学』一〇巻一〇月号、三二―四一ページ。
- Kendon, A., 1967, "Some functions of gaze-direction in social interaction," *Acta Psychologica*, vol. 26, pp. 22-63.
- Miller, Laura, 1991, "Verbal listening behavior in conversations between Japanese and Americans," in Jan Blommaert and Jef Verschueren (eds.), *The Pragmatics of International and Intercultural Communication*, Amsterdam: John Benjamins Publishing, pp. 111-130.
- 久保田真弓、一九九三、「日米バイリンガル者によるうなずき方——あいづちの一考察」、『龍谷大学国際センター研究年報』二号、四一―〇二ページ。
- 松田陽子、一九八八、「対話の日本語教育学——あいづちに関連して」、『日本語学』七巻一二月号、五九―六六ページ。
- Maynard, S. K., 1986, "On Back Channel Behavior in Japanese and English Casual Conversation," *Linguistics*, vol. 24, pp. 1079-1108.
- マレービアン、A (西田司・津田幸男・岡村輝人・山口常夫訳)、一九八六、『非言語コミュニケーション』、聖文社。
- Mizutani, N., 1982, "The Listener's Response in Japanese Conversation," *Sociolinguistic Newsletter*, vol. 13, pp. 33-38.
- 水谷信子、一九八八、「あいづち論」、『日本語学』七巻一二月号、四一―一三ページ。
- 杉戸清樹、一九八九、「ことばのあいづちと身ぶりのあいづち——談話行動における非言語的表現」、『日本語教育』六七号、四八―五九ページ。
- White, S., 1989, "Back Channels Across Culture: A Study of Americans and Japanese," *Language Sociology*, vol. 18, pp. 59-76.
- Yngve, V. H., 1970, "On getting a word in edgewise," in M. A. Campbell et al. (eds.), *Paper from the Sixth Regional Meeting, Chicago Linguistic Society*, Chicago: University of Chicago Department of Linguistics.